

教務だより

2013年7月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

「いじめ」ところの知能指数

茗溪塾塾長 宇野雅春

いじめ防止対策推進法が参議院で可決されたのは、つい最近のことです。そこで論議を呼んでいるのがいじめをしている生徒への「出席停止命令」です。法案が通っても何も変わらないという結果を招かないための罰則ということになります。罰則だけ強めても問題の解決にならないのでは？と疑問を呈する人も多いようです。また誰がいじめの張本人なのかということは、いじめをしている本人でさえよくわかっていないことなので、特定は難しいかもしれません。嫌なことを言われたとか、嫌なことをされたとか、いじめの発端になるようですが、その行動を誘発した自分の暴力や、無視などの関係の暴力は非常に分かりにくいのですが、暴力などの問題行動については「警察」への通報も含めて厳しい審判が下されることになりそうです。

いじめが問題として大きくとらえられているのは、アメリカ、イギリス、カナダなどの言ってみれば先進国です。過剰に保護され豊かに育った子供には「人の痛み」的なものは理解しづらいようです。ちょっとしたことで「切れる」のも、そうした苦勞を知らないことからくるのかもしれませんが。子供が「いじめられている」ということを最もつらく感じるのはその子の親です。いじめている側の親は、逆に告発されたりすると、「なんでそんなに大袈裟に！」と思うらしいのです。

発達途中の子供たちは色々な側面を持っています。優しい気持ちも意地悪な感情もその内面は複雑な上に時間とともに変化していきます。そうした子供たちをどう導けばよいのか、大人としては非常に迷います。原則は、「いじめ」とは「集団で個人を精神的にいためつける行為」であり、犯罪であるということです。それを絶対許さない強い気持ちが大人には必要であり、そこだけはあれこれ理屈を並べても、守らなければならない一線だと思えます。軽い気持ちで、友達の物を隠し、探している姿を見ておもしろがる…本人達は軽い気持ちでも絶対許してはいけない、と思っています。

昨今 EQ（こころの知能指数）という研究が盛んになされています。EQ は 2 つの能力から成り立っています。1 つは自分の感情に気付いてコントロールする能力と自分を高めようとする能力です。もう 1 つは、他者が抱えている感情に気づき、他者とうまくやっていく能力です。IQ というのはいわゆる「頭の良さ」で、IQ の高い人は成績が良い人ということになります。ただし、そういう人が必ずしも人間関係をうまくコントロールし、精神的に充実した生活を送っているかというところから、EQ の研究が盛んになってきたといえます。就職などでもコミュニケーション能力が重視され EQ はますます重要な要素として認められてきています。いじめの問題もこの EQ を高める必要性として関連付けられています。

今の研究でわかってきていることは、EQ が高い人ほど生活実態が良く、生活への満足度も高いということです。将来の夢に取り組んで満足度が高く、趣味や勉強も十分にこなして友達も多いということです。また、EQ は様々な経験によって高められるということが今、研究されています。経験の広さや種類がそこでは必要になります。受験勉強の中でも、成績だけ取れば、将来は万全という時代は終わっています。どうやって EQ を高めていけるのが課題ということですね。「いじめ」は先進国の中でたくさんの悲劇をつくっています。いじめた方も、大きく傷を負って一生引きずることになります。

現実を、より肯定的にとらえ、前向きに周りを見る目が必要なのではないかと思えます。受験勉強の天王山としての「夏」も、よりポジティブに「夢に向かって全力投球の時期」と位置付け積極的に経験を積み上げることが大切だと思います。

否定的な状況ばかりを避けよう避けようとする努力することより、否定的なことも自分の向上につながるという確信で取り組むその「努力」の方が楽しく充実するはずですね。

いじめをついついしているような生徒に未来はありません。一生、否定的な状況を誰かのせいにして、うまく立ち回りながら友達もなく、不満ばかりを抱えて生きていくことになります。「受験」でも「失敗を自ら誘導すること」になるはずですね。

この豊かな時代を本当に豊かに生きるためにこそ EQ を高め、世界に羽ばたいてほしい…そんな願いを込めて夏を準備しています。